

創立百周年記念誌

安八郡安八町立名森小学校

安八郡安八町立名森小学校
創立百周年記念

安八郡安八町立名森小学校
創立百周年記念

安八郡安八町立名森小学校
創立百周年記念

安八郡安八町立名森小学校
創立百周年記念

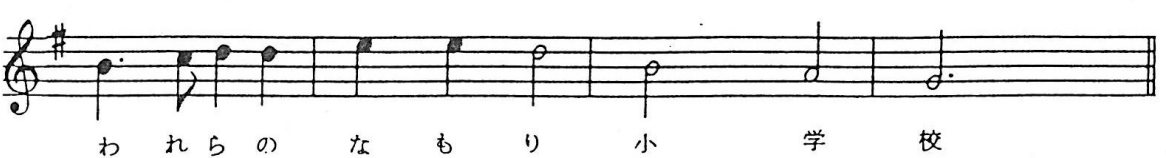
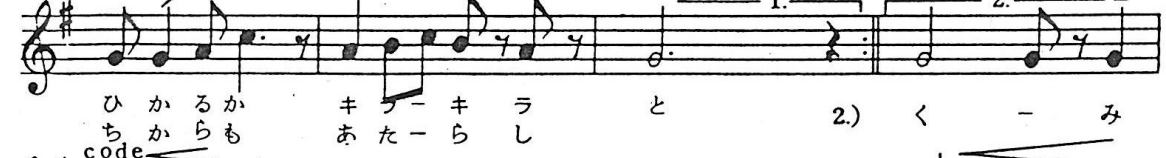
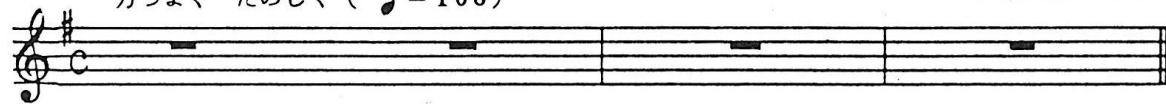
安八郡安八町立名森小学校

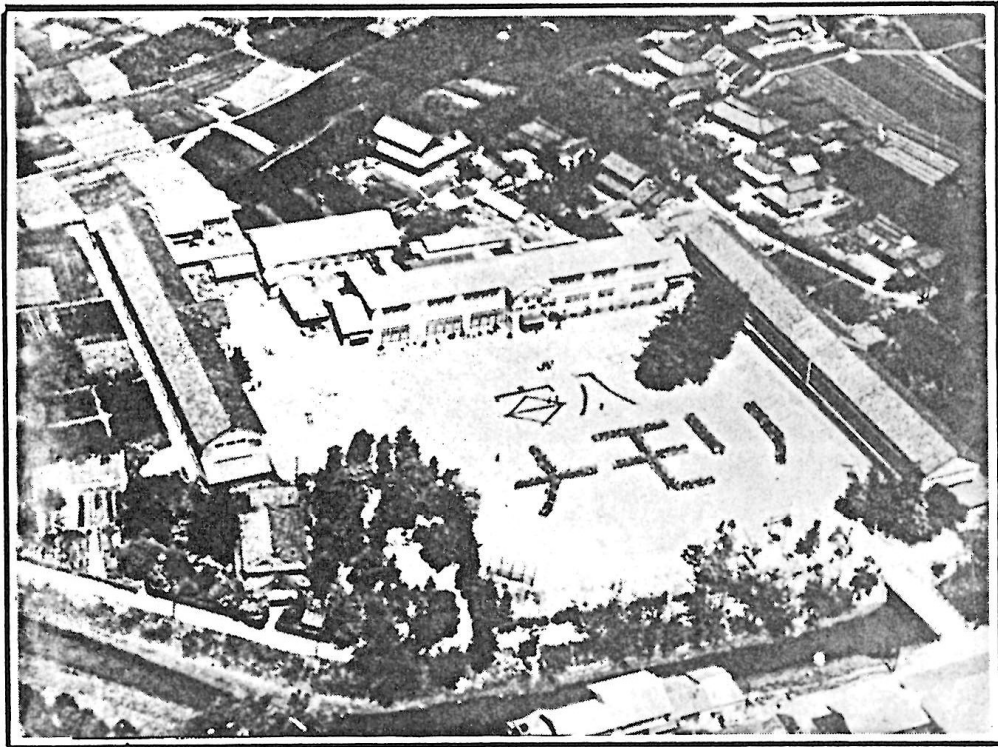
安八郡安八町立名森小学校
創立百周年記念実行委員会

名森小学校校歌

土岐 善磨 作詞
平井康三郎 作曲

カブよく たのしく (♩ = 108)





名森小の あゆみ

校歌

まどにイチヨウのわかばがそよぎ
 庭に カエデのもみじが照るとき
 あかるくいつも みなすこやかに
 たのしく まなぶ よろこびを
 ヒマラヤスギの葉におく つゆも
 知ってひかるか きらきらと

二

ひろく流れる 長良よ 揖斐よ
 山は 伊吹のしずかな みどりよ
 ただしい道を たがいに進み
 たゆまず はげみ ゆくところ
 ひらける平野 希望にみちて
 そだつ力も 新しく

見よさらにいま 歴史をほこる
 われらの 名 森 小 学 校

一九六一年七月

土岐 善 磨



登龍

校長室に、古びた棟瓦が一個大切に保存されている。説明書に、

登龍学校の棟瓦

この棟瓦は、明治十七年大野村にあった登龍学校が、氷取村に移転改築され、偉容を誇った当時の校舎に飾られた棟瓦である。

角と鬚も足も爪もすでにこわれてないが、巨龍が玉を抱いて風雨を起し、雲に乗って昇天する姿を眼前にほうふさせる。

この姿は、将にわれわれの祖先が郷土の子孫に期待した姿であったであろう。

登龍学校が明治四十二年七月名森尋常高等小学校として現地に移転改築された時、名森農業協同組合倉庫の新築とともに、その棟瓦として使われ、再び人々にその理想を呼びかけてきた。

昭和三十八年十月、倉庫改築のため御用済となったのである。風雨に堪えて九十年、先人の子弟育英への情熱を思い、その心を後世に伝えたいと汚れを落して学校の大切な文化財とした。

昭和三十八年十月十五日

登龍学校の登龍とは、故事熟語大辞典によると、

登龍門。龍門は山の名、黄河上流にあり。河水ここを經るときは最も迅速なり。鯉魚ここを登れば化して龍となるという。よりて人の榮達するにたとう。また名士に面接することという。

と述べられている。学校に学ぶ意義を率直に、子弟の将来への期待によせて名付けたものである。創設当時の人々の心情が切々と胸をうつ。



お寺を借りて

登龍義校

の

創設

明治六年～明治十三年

明治七年
学校新設金剛山
成育利徳

明治新政府の大方針は、五ヶ条の御誓文に示された通り、封建制度の打破であり、その目標は、富国強兵であった。その根底をつちかうものは学問であると考え、

「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なき」

を目標に、全国に学校の普及することをすすめ、全国を八大学区、一大学区を三十二中学区、一中学区を二百十小学区に分けた。

それによると、岐阜県は、第二学区。名森地区は、第三十一中学区。(小学区は明らかでない。)に属した。

明治六年五月。現在の名森校下にあった十一ヶ村(森部、南今ヶ淵、北今ヶ淵、大野、大明神、氷取、中須、善光、大森、南条、中)共同して許可をとり、大野村にあった法嚴寺の庫裡を借りて登龍義校を開いた。大野村に遠い森部村には光頭寺。北今ヶ淵村には浄満寺。中村には敬泉寺を借りて、登龍第一、登龍第二、登龍第三支校とした。これがそもそもの名森小学校の創設である。

*

教師は、校下寺院の僧侶がなり、校務には、各村の戸長があたった。学校沿革誌によると、明治十年下等小学科卒業生徒七名と記されている。このように学校ができたとはいえ、児童の就学率はまことに低いものであっただろう。

しかし、学問といえは僧侶、武士階級のものであった当時、この学制は目を見張るものであったことはいままでもない。

明治十年の日本の就学率は、男子五六%、女子二二・五%、平均三九・九%であったことから、ザンギリ頭をたたいてみれば、文明開化の音があるといった時世を推察することができる。

明治十三年。登龍義校には、二百十二名。森部支校には八十名。中村支校には二十五名の児童が学んでいた。

登龍第一支校

(森部村)

登龍第三支校

(中村)

登龍第二支校

(北今ヶ淵村)

登龍義校

(大野村)

新 校 舎

登 竜 学 校

登 竜 尋 常 小 学 校

明治十四年～明治四十年

明治十四年

登龍義校は登龍学校と改めた。なお北今ヶ淵の第二支校は従前通りであったが、第一支校は森部学校第三支校は中学校として独立し、教育の画期点となった。

明治十七年十一月

登龍学校の校舎を氷取村一番地（現在の旧安八町役場の地）に建て、第二支校を合併し、はじめて学校としての形を整えた。

その開業式を翌十八年三月二十三日に行ない、岐阜県令小崎利準氏をはじめ三百人以上の参会者をえて盛大であったという。時の新築委員は、学務委員桑原博愛、戸長鈴木重三郎、戸長富田左之助、補助に高木常右エ門と記録されている。

明治十九年四月

わが国独特の制度として「小学校令」が公布された。登龍学校は登龍尋常小学校（四ヶ年）となり、登龍高等小学校と登龍小学校簡易科を併設し、森部学校は森部簡易小学校（二十年に尋常小学校）中学校は中簡易小学校と改めた。全児童を対象にした普通教育が始まり、授業科も定めにより徴収された。記録によると明治十九年の教員、児童数、および授業科は次の通りであった。

（教員）（児童）

登龍高等小学校	一	二四	五四円三五銭〇厘
登龍尋常小学校	三	一六三	八〇円〇九銭一厘

登龍小学校簡易科	一	四一
森部簡易小学校	二	六二
中簡易小学校	一	三〇
		四〇円六三銭二厘
		（二十年）

明治二十三年十月

新しい小学校令により、小学校簡易科が廃止され登龍尋常高等小学校と改められた。森部尋常小学校中尋常小学校もそれぞれ独立し、新しい学校制度のもとに始めて義務教育が実施された。

十月三十日に「教育勅語」が發布され、下賜された膳本奉読式が翌二十四年一月一日に行なわれた。国民道德および国民教育の根本理念が明らかにされて、その後数十年にわたる学校教育の基礎がもたらされた時期であるといえよう。

卒業證書

岐阜縣平民

棚橋半七

明治元年八月生

高等小學校 修業年限ノ
教科卒業シテ下ラシ證ス

明治三十四年三月十五日

岐阜縣安部郡登龍尋常小學校校長高橋清

第貳號



明治三十八年三月

明治二十四年十月二十八日午前六時三十分

濃尾大地震である。明治十七年に新築費二千余円をかけた総坪数百九十四坪三合五勺の校舎は、一瞬の内に倒れた。この時、学校の備品や設備は殆んど破損し、本も噴出する泥水によごれて使用できるものは殆んどなかったという。

この稀有の天災によって窮乏した村財政であったが、仮建築費百五十円を計上して、翌二十五年五月十六日着工、六月下旬に竣工し、七月六日から仮校舎で開校することができた。

明治二十七年二月二十五日

本校舎が新築落成した。当時の記録によると、総工費一千八百六十一円六十九銭六厘。学令児童七百人に対して就学児童数は二百八十名である。

明治三十年四月

名森村が誕生し、名森村立登龍尋常高等小学校と改められた。

明治三十年十月十一日

訓導兼校長として高橋清先生が就任された。これまでに校長職に当ると思われるものに、明治六年、主者鈴木重三郎氏、幹事富田左之助氏が選ばれ、十九年に棚橋専次郎氏が幹事になると記録されているが、高橋先生以前の教師は資格として訓導であった。なお前後して、森部校には土富岩三郎先生、中校には宮戸皆邊先生が校長となり、各校の初代校長として記録されている。

この頃の卒業生は、在籍児童数にくらべて少なかった。卒業以前に退学してデッチ奉公や家事につく者が多かったからである。特に女子の高等科卒業生は、明治三十三年に始めて一名あった。男子にくらべ女子の就学率は低かった。また、明治三十四年に身体検査を始めて行ない、医者から、トラホーム重症十二名、軽症二十九名を指摘された。当時の学校の様子がうかがわれる。

高等科四年卒業生の中から中学校へ五名進学をしたのは明治三十五年であり、この頃から教育に対する一般の関心も高まってきたように思える。

従って就学児童数が急増加し、校舎も狭かったので、遂に高田五三郎氏の家を仮分教場に借りうけて児童の急増対策がとられた。既に新しい校地として現在の名森小学校の土地を運動場に使用していたが、増築の必要な時となってきた。

明治四十年

義務教育が六ヶ年に延長された。明治三十六年に国定教科書が定められて以来、翌三十七年から全国一様に国定教科書が使用され始めたこととあいまって、義務教育六ヶ年延長は小学校教育の新しい段階を迎えたといえよう。

九月に新しい校舎が現在の地に増築落成し、森部、中の両尋常小学校を合併する話が急速にすすめられていった。

明治四十一年～昭和十五年

森部、中の両校を登龍尋常高等小学校に合併し、それぞれを分校とした。そうしてその名を名森尋常高等小学校（六ヶ年）と改めた。

児童数もふえてきたので、翌四十二年、校舎増築移転の許可をとって工事に着手し、現在の西舎のすぐ東側のところに校舎が完成した。

さらに大正二年には、東南の角にある公園に接する土地を借り入れ運動場を拡張し、翌三年に、北舎の前に井戸を堀って水を確保し、西舎の前に池を堀って学校に風致をそえた。現在の校庭にそびえる、カエデ、イチヨウは、当時小さい苗をこの池のほとりに植えたものである。ヒマラヤスギは、その後植えられた。

この頃の教科は、修身、読方、綴方、書方、算術、歴史、地理、理科、図画、唱歌、体操であつた。

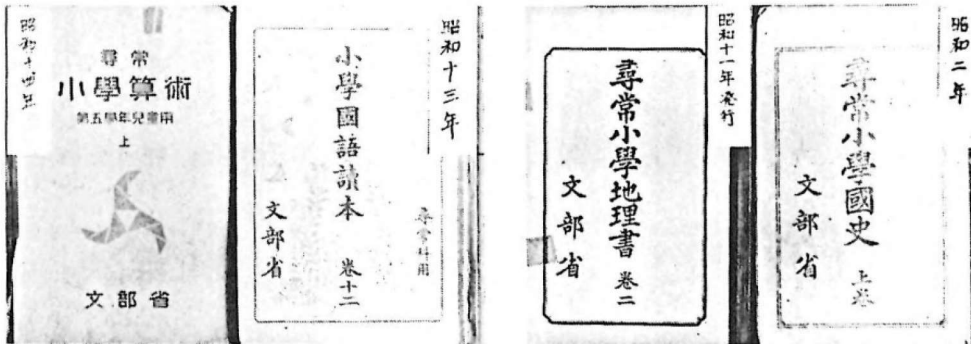
南舎に普通教室三（講堂兼用）御影室、裁縫室、物置等が増築され、学校規模は大きくなってきた。

この頃より理科教育を改善し、地理および日本歴史の時間がふえて国民精神が強調されるようになり、中学校入学のための準備教育も盛んであった。

このように名森尋常高等小学校は、義務教育にふさわしい教育環境を整え、名実ともに充実してきたので、昭和二年一月十日、石柱の校門を建てて名門校を象徴し、それが今日に伝わっている。



大正 7 年 3 月



昭和三年十一月三日

明治節が制定され、第一回の拝賀式が挙行された。式典には、教育勅語を奉読し、祝日についての訓示をすることが決められていた。

昭和九年四月二十二日、現在の国旗掲揚塔のところに奉安殿を竣工した。

岡田郁之助氏の寄附によるものである。

岡田郁之助氏は、脇坂文助氏の三男。母の里方に養子として岡田姓を名乗って大阪市に住まわれた。前から母校に寄附を思い立っておられたが、実現しない先に逝かれた。その妻はな、養女千代子の両氏は、亡父の遺志を継いで奉安殿建築資金として二千三百円を寄附されて実現したものである。

昭和七年

名森小学校には、身体検査表が残っている。

明治四十三年と昭和七年の一年生の記録を比較してみると、昭和七年の児童の体格はよくなっている。

年齢七才男子の平均

(明治四十三年)

(昭和七年)

身長	一〇五・一センチメートル	一一五・四センチメートル
体重	一七・五キログラム	一八・八キログラム
胸囲	五三・八センチメートル	五八・六センチメートル
年齢七才女子の平均		
身長	一〇四・四センチメートル	一〇六・九センチメートル
体重	一六・九キログラム	一七・三キログラム
胸囲	五二・一センチメートル	五三・四センチメートル

昭和十一年十二月二十日

西舎が甚しく老朽化したため、西舎二階建二百四十坪が改築され、宿直室、湯沸場、便所、講堂が新築されて現存する西舎の落成をみた。工費四万二千二百余円。運動場を中にもつコの字型の配置は当時の学校の典型で、名森小学校の偉容が完成した。

昭和十五年三月三十一日

森部、中分教場が廃止され、名森小校下の全児童がこの時から一つの学校に学ぶようになった。

* *

名森小学校には、早くから「少年消防隊」が組織されて、その訓練が実によく行なわれていた。かれんなるが故にではあるが、おとなの消防隊を凌ぐとさえいわれたほどであった。

あどけない小学生が、隊長の号令一下、元気いっぱい運動場に繰りひろげる団体活動は、当時の人氣の的であった。

当時の隊長、隊員は、今日、安八町の中堅として活躍されていると思うと感無量である。

* *

昭和六年の満州事変以来、小学校教育も戦争の影響を受けるようになってきたが、十二年の日華事変を契機として、さらに著しい変化をきたし、大正以来の小学校教育の方針は次第に戦時下教育という考えにきりかえられていった。

戦争下にあった

名森国民学校

昭和十六年～昭和二十一年



八月十五日	宿直員	新井 三子
八月十五日	児童会	新井 三子
八月十五日	運動部	新井 三子
八月十五日	水曜日	晴天
八月十五日	一、二、三、重放送あり	
八月十五日	一、休戦條約成立	
八月十五日	一、午前 大野 善光 外善光	
八月十五日	午後 八森	
八月十五日	父兄懇談会	
八月十五日	一、来校者 校長先生 安井先生	
八月十五日	一、来校者 説教 安部先生	
八月十五日	宿直記事	

昭和二十年八月十五日



昭和十八年四月二十九日

昭和十六年四月一日

名森尋常高等小学校は、名森国民学校となり、初等科六年、高等科二年がおかれた。

国民学校教育は、心身の錬成が中心目標となってそれは国をあげて国運を開拓しようとする決意の現われであった。

かくて昭和十六年十二月八日。太平洋戦争が始まった。教育内容も、時局の変化によって、武道（剣道・柔道・長刀）が加えられ、特に集団訓練が中心となり、「滅私奉公」の精神が強調された。戦局の緊張とともに前線、銃後の区別がなくなり、学校もまた第一線であった。

児童は、食糧増産の一翼をにない、校庭を耕してかぼちゃ、さつまいもを作り、堤防に大豆を付け、桑の皮を集めて繊維製造に協力してきた。そしていわゆる勉強は、第二とならざるをえなかった。

昭和二十年

米軍の空襲は激化し、学校も宿直員を増加し、バケツ消火訓練や火タタキ訓練を行なって志気を高めたが、昭和二十年八月十五日終戦を迎えることとなった。学校日誌には「正午、重大放送あり」との。終戦を迎え、修身、国史、地理、武道の教科は廃止され、十二月ご真影の奉還。二十一年八月一日。奉安殿の撤去が行なわれた。明治以来七十有余年、一貫して流れた国民の基礎的精神は、学校から形式的に一掃されていた。

名森小学校

昭和二十二年以降



昭和二十二年四月一日

六・三・三制の実施によって新しい学校教育が始まった。

名森国民学校は、その名を名森村立名森小学校となり、高等科は廃止されて登龍中学校となった。

新制中学校の発足によって、小学校の北舎平屋、講堂、北舎二階の一部を中学校の教室に貸していたが、昭和二十四年八月に中学校の校舎ができたので小学校の独立した姿にもどった。

昭和二十七年

新しく教育委員会が発足し、初代教育長に助役の富田覚次氏が就任された。

この年、奉安殿跡に、経費四万五千円をもって、国旗掲揚塔が建てられた。戦後、ともすると忘れ勝ちだった日の丸の旗が再び学校にはためくようになった。しかし旗を見る目の世代差が感じられた。

昭和二十九年三月十五日

教育委員会の発足によって、校舎改築工事の計画が具体化し、現在の北舎が工費一千一百万円、附帯工事百二十五万四千五百三十円をかけて新築された。木造二階建・五百五坪五合五勺、近代的な校舎として本館と共にその偉容をなしている。

昭和三十年四月

名森、牧、結村が合併して安八村となる。

昭和三十一年七月十五日

中須川橋を永久橋にかけかえ登龍橋と名命する。

昭和三十五年四月一日

町制が実施され安八町となる。(町長・堀薫氏)
安八町立名森小学校となった。

昭和三十六年以降

学校充実期である。

小中共有で学校プール、体育館が完成し、運動場も整地されて体育施設が完備したこと。

理科室や家庭科室を改造し、手洗施設を増し、禽舎、兎舎、池等の学習環境が整ったこと。

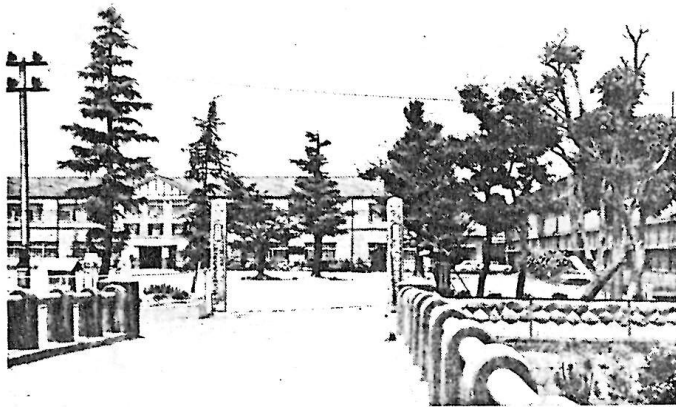
教室照明、教育機器施設、校内放送等、教育の現代化に対応した教育条件がととのってきたこと等、学校としての教育環境は大幅に充実されてきた。

学校給食は、すでに昭和二十五年七月一日から始められていたが、小学校給食室として昭和三十二年に完成し、昭和四十六年町立給食センターに引き継がれるまで学校において実施されてきた。この間、地域社会の食改善に貢献が大きかったことから、昭和三十七年文部大臣より表彰を受けている。

昭和四十八年

中須川の改修工事に伴って運動場の土手に新しくフェンスが張られて児童会の手で植樹が行なわれ、八月に、創立百周年記念式典が実施された。

この年、登龍中学校の新校地が他所に決定され、町内各小学校の改築長期計画がすすめられる。それは名森小学校の大発展のために、今静かにその力をたくわえているかのように見受けられる。



昭和四十一年

図書館コンクール



学校職員

今回、表彰を受けられる桑原たい先生（三十五年）竹内茂一郎先生（十七年）古沢てつさん（二十一年）をはじめ、すでに逝去された坂三造先生（二十五年）沢はるえ先生（十七年）のように本校には永年にわたって勤めていただいた先生が多い。

教師は子どもとじっくり取り組み、新しい教育内容を進んで研究してきた。

三十二年には算数、三十五年は学校給食の県指定その後、国語、社会、算数、道徳、特活および図書館教育にそれぞれの成果をあげてきた。

今、学校に次の表彰額があげられている。

交通道德の高揚とその実践成果優秀

学校給食成績優秀 PTA運営優秀

郵便貯蓄活動優秀 図書館教育優秀

学校安全教育優秀

フラワーコンクール優秀

ラジオ体操東海地方優秀

名森小PTA

PTAは昭和二十四年四月に発足した。初代会長に水谷増太郎氏が選ばれ、それ以来、歴代の会長のもとに教育環境の整備と学校、家庭の連携に尽力してきた。

二十五年 学校放送施設の寄附

三十二年 学校給食共同調理場の建設推進

三十五年 校旗の寄贈

三十六年 カラーテレビの寄贈

三十九年 校内花壇の設置

四十二年 各教室のテレビ寄贈

特に、学校運動会全員参加の気運を盛りあげ、学級PTAの推進、家庭教育学級の運営、親子二十分間読書の実践等、PTAの主體的な活動が展開されてきた。

名森小学校育英基金

北今ヶ淵出身の岩田太一氏が昭和四十六年二月六日に逝去され、母校の子どもにと百万円を贈られたお金を基金とし、さらに、安藤まつさんの昭和四十七年一月十一日に逝去され、二十万円贈られたお金を基金に加えて、この利息分から毎年の卒業生に卒業記念品として渡されている。

卒業記念

卒業生

三十八年	天幕	(九七名)
三十九年	水族館	(一一二名)
四十年	岩石園	(九三名)
四十一年	考える人	(九四名)
四十二年	掲示板	(九〇名)
四十三年	大時計	(七〇名)
四十四年	校庭遊具	(七〇名)
四十五年	大時計	(八三名)
四十六年	天幕	(七四名)
四十七年	校歌碑	(一〇七名)

今もなお大切に使われている。

歴代教育長

富田 覚次 昭和二七年二月～三〇年七月
 渡辺 勇 昭和三〇年八月～三九年三月
 堀 秀栄 昭和三九年四月～四六年九月
 安藤 孝夫 昭和四六年一〇月～四七年三月
 荒川 好男 昭和四七年四月～

十一代 高橋 岩三 昭和二三年三月三十一日
 十二代 高田 兼作 昭和二四年一〇月三十一日
 十三代 小林 貢 昭和二七年三月三十一日
 十四代 北村 藤雄 昭和二九年四月一日
 十五代 荒川 好男 昭和三五年二月五日
 十六代 柳瀬 司 昭和四七年四月一日

川合 幸夫 昭和四七年～

(歯科医)

岩田 太一 昭和二七年三月～四五年
 岩田 周吉 昭和四五年二月～

(薬剤師)

豊田 信男 昭和四四年六月～

歴代学校長

(就任日)

初代 高橋 清 明治三〇年一〇月一日
 森部校 土富岩三郎 明治三三年一〇月三十一日

(初代)

中校 宮戸 皆遵 明治三〇年四月一日
 明治四一年三月

(初代)

二代 若原 彦造 明治三六年一〇月七日
 三代 渡辺 純雄 明治三九年一月六日
 四代 佐分利民次郎 明治四一年九月二八日
 五代 横幕 薫 明治四三年三月一四日
 六代 村瀬 耕作 大正三年五月二日
 七代 坂 三造 大正一一年九月二日
 八代 横幕 三策 昭和二四年八月三十一日
 九代 西田 正雄 昭和一八年三月三十一日
 十代 岡部 武雄 昭和二二年四月一〇日

歴代PTA会長

初代 水谷増太郎 昭和二四年四月～二五年
 二代 赤尾 幸一 昭和二五年四月～二六年
 三代 岩田 領吉 昭和二六年四月～三〇年
 四代 高橋 宗雄 昭和三〇年四月～三三年
 五代 川合 進一 昭和三三年一月～三七年
 六代 岩田 基三 昭和三七年四月～三八年
 七代 西松建四郎 昭和三八年四月～四三年
 八代 金森 正臣 昭和四三年四月～

校医・歯科医・薬剤師

(校医)

川合 犀治郎 大正三年二月～昭和五年二月
 奥田 幸治郎 大正五年二月～
 石田 鎌一 昭和二八年三月～三九年
 川合 治夫 昭和三九年～四七年

旧職員名

明治六年～明治二十九年
 この間の職員は、三十六名。その着任、転任月日は不明である。

明治三十年～昭和二十一年

この間の職員は、二百七十八名が記録されているも、一部職員名の不明な年次がある。

昭和二十二年～昭和四十七年

この間の職員は、百三十一名。

紙面の都合で以上の旧職員名を省略する。

しかし、十年以上在職されたうち生存者は、

桑原たい、棚橋武夫、竹内茂一郎、

旧井ぎん、古沢寛一、旧井政子、田中良夫

山田鈴子、杉山 清、林 正乗、沢 晴江

関谷敏郎、古沢てつ

の先生方であつたので紹介させていただきます。

現職員

(氏名)	(在職年数)	(住 所)
柳瀬 司	二	不破・垂井町綾戸
関谷 敏郎	二	安八・墨俣町下宿
水谷 太郎	一	輪之内町下大樽
梶井 善弘	三	安八・安八町東結
棚橋美代子	二	輪之内町楡俣
高橋 満津	四	大垣市宮町
三輪 専	六	輪之内町藻池
高橋 次郎	一	安八・安八町牧
伊藤 久美	二	輪之内町四郷
野村 幸子	七	輪之内町里
伊藤 重彦	一	輪之内町中郷新田
中島千恵子	八	輪之内町四郷
大野 光男	二	大垣市南高橋
坂 美也子	二	安八町 中
坂 貴子	二	安八町 中
江木 美佐子	三	大垣市室町
棚橋 学	一	輪之内町楡俣
渡辺美恵子	一	安八町 牧
名和ちず子	一	神戸町神戸
高木美知代	二	不破・垂井町大滝
児玉久美子	一	神戸町神戸
浅野 清子	八	大垣市大井
古沢 てつ	二二	安八町大明神



創立百周年記念実行委員会

(役員)	(氏名)
委員長	金森 正臣
顧問	西松健四郎
(PTA会長)	岩田 基三
(七代会長)	川合 進一
(六代会長)	岩田 領吉
(五代会長)	柳瀬 司
(三代会長)	関谷 敏郎
(小学校長)	鈴木佐代子
(教 頭)	坂 安子
(PTA副会長)	中村かな子
(PTA副会長)	水谷 太郎
(PTA会計)	古沢クニ子
(PTA書記)	坂 初子
(会計監査)	藤田てつ子
(会計監査)	

この記念誌は、荒川教育長さんが特に名森小学校のために執筆してくださった原稿をもとに編集したものです。

執筆者の荒川先生、題字を揮毫された芳堂先生、資料提供の棚橋半七先生をはじめ協力くださいました方々に心からお礼申します。

発行者 創立百周年記念実行委員会

昭和四十八年八月二十一日

昭和四十八年八月二十一日印刷発行

発行者 安八郡安八町立名森小学校

印刷者 創立百周年記念実行委員会

大垣市築捨丁四丁目一六

大 垣 孔 版 社

電話〆〇五八四〇八九一六九八(代)

司 瀨 柳		
男 好 川 荒	夫 孝 藤 安	
四六・一〇・一	第三代教育長職務代理	安藤孝夫
四六・一二・一五	図書館教育東海地区優秀 につき表彰	
四七・四・一	第十六代校長柳瀬司 第四代教育長職務代理	
四八・一・二	学校宿日直廃止に伴って 管理細則実施	
四八・六・七	子ども郵便局郵政局表彰	
四八・八・二一	創立百周年記念式典	

四六・二

給食センター建つ

学 校 の 沿 革

